三重県埋蔵文化財報告 185

六地蔵C遺跡・伊勢路道筋遺跡発掘調査報告

――名賀郡青山町伊勢路所在――

１９９８・９

三重県埋蔵文化財センター

序

青山町は三重県の西部、旧伊賀国に位置します。この地域には多くの遺跡の存在が知られており、古くは夏見廃寺の発掘調査が京都大学によって行われ、寺院研究に大きな影響を与えました。また、最近では祭祀遺跡として知られる城之越遺跡が史跡整備され、話題を呼んだことは記憶に新しいことだと思います。さらに近年の発掘調査の成果を見ても、この地域がいかに重要な地域であるかを物語っています。青山町は、古くから畿内と東国とを結ぶルート上に位置しており、交通の要衝でありました。そして、それは現在でも近鉄大阪線や国道165号線が貫くなど、その重要性は変わっていません。今回発掘調査が行われた六地蔵Ｃ遺跡・伊勢路道筋遺跡は、名賀郡青山町伊勢路に所在します。この伊勢路の集落の中には、今もなお常夜灯が残り、街道沿いの宿場として栄えた頃の情景を偲ばせています。

今回の六地蔵Ｃ遺跡・伊勢路道筋遺跡の調査では、中世の遺構や遺物を確認することができました。発掘が行われるのは、僅かな範囲でありますが、確実にその地域の歴史を明らかにしています。こうした調査の積み重ねによって、また新たな発見があるものと考えております。発掘調査を通じて、地元の方々をはじめ、広く県民の方々にも文化財保護への関心を持っていただけたならば、これに優る喜びはありません。

調査に際しましては、青山町伊勢路周辺の方々をはじめ、青山町教育委員会、県土木部（現：県土整備部）各位から、多大なご協力を頂きました。文末となりましたが、関係各位の暖かいご配慮に心からお礼を申し上げ、冒頭の挨拶とさせて頂きます。

平成10年 9 月

三重県埋蔵文化財センター

所長　大　井　與　生

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した平成９年度主要地方道伊賀青山線緊急地方道路整備事業に伴う六地蔵Ｃ遺跡・伊勢路道筋遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は以下の体制により実施した。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

第二係長　前川嘉宏（調整）、主事　坂倉一光、技師　新名　強

3．調査にあたっては、青山町在住の方々、青山町教育委員会、青山町役場建設課、青山町役場税務課、および県土木部道路建設課（現：県土整備部道路整備課）・上野土木事務所（現：伊賀県民局建設部）から多大な協力を受けたことを明記する。

4．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。報文執筆は調査担当者が行い、目次に分担を記した。

5．挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°30′（平成元年）である。

6．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

7．当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき　…　「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

わん　…　「椀」「碗」等があるが、「椀」を用いた。

8．当報告書での遺構は、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

ＳＢ　…　掘立柱建物　　ＳＤ　…　溝　　ＳＫ　…　土坑

pit…　ピット、柱穴

9．当発掘調査による図面・写真等の記録類並びに出土品は三重県埋蔵文化財センターに於いて保管している。

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前　　言……（坂倉一光）……1
Ⅱ　位置と歴史的環境……（新名　強）……2
Ⅲ　六地蔵Ｃ遺跡　調査の成果……（坂倉一光）……4
Ⅳ　伊勢路道筋遺跡　調査の成果……（新名　強）……8
Ⅴ　付編　六地蔵Ｃ遺跡周辺の遺跡……（新名　強）……14

挿図・表目次

Ⅱ　位置と歴史的環境
第１図　遺跡位置図……2
第２図　遺跡地形図……3
第３図　調査区位置図……3
Ⅲ　六地蔵Ｃ遺跡
第４図　調査区遺構平面図・土層断面図……5
第５図　出土遺物実測図……6
第１表　遺物観察表……6
Ⅳ　伊勢路道筋遺跡
第６図　土坑ＳＫ２土器出土状況図……8
第７図　掘立柱建物ＳＢ１平面図・断面図……8
第８図　調査区遺構平面図・土層断面図……9
第９図　遺物実測図……10
第10図　石器実測図……11
第２表　遺物観察表……13
付編　六地蔵Ｃ遺跡周辺の遺跡
第11図　六地蔵Ｃ遺跡周辺遺跡配置図……15

図版目次

六地蔵Ｃ遺跡
図版１　調査区北半部全景（北から）……16
図版２　調査区南半部全景（南から）……16
図版３　出土遺物……17
伊勢路道筋遺跡
図版４　調査区全景（西から）……18
図版５　調査区全景（東から）……18
図版６　出土遺物……19
図版７　出土遺物……20
六地蔵Ｃ遺跡周辺の遺跡
図版８　六地蔵３号墳（西から）……21
図版９　六地蔵３号墳（南から）……21
図版10　六地蔵１号墳（南から）……22
図版11　東禅寺跡推定地（東から）……22

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

六地蔵Ｃ遺跡は、県営ほ場整備事業に先立って行われた平成５年度分布調査によって遺物の散布が認められ、平成５年度末の試掘調査によって遺跡であることが確認された。平成９年度主要地方道伊賀青山線緊急地方道路整備事業に伴って現状変更が余儀なくされることとなり、再度、平成９年５月に試掘調査を行ったところ、今回の県道建設工事に伴って発掘調査が必要な範囲(800㎡)が確定した。

伊勢路道筋遺跡は、上記県道建設工事に先立って平成７年度分布調査によって遺物の散布が認められ、平成８年11月に試掘調査を行ったところ遺跡であることが確認された上、今回の県道建設工事に伴って発掘調査が必要な範囲(400㎡)が確定した。なお、当遺跡は青山町伊勢路字高寺に所在するが、隣接する字道筋に遺跡の中心が存在する可能性が想定されるため、伊勢路道筋遺跡という名称とした。

2　調査の経過

(1)調査経過概要

六地蔵Ｃ遺跡については、調査区中央にコンクリートの用水路がありその部分を除いた750㎡を調査対象とした。調査期間は平成９年７月14日～８月８日の26日間であった。

伊勢路道筋遺跡については、国道165号線に沿って側溝があり、水田への用水路として活用されていたため１ｍ程控えて300㎡を調査対象とした。調査期間は８月18日～９月４日の18日間であった。

今年度、青山町内においては中出向遺跡・花代遺跡の発掘調査が行われており地元の方々が多数参加されていた。そのために当遺跡の発掘調査には、当初、現地作業員が５名しか集まらず、ベルトコンベアーも運ぶことができないような状態であった。その後、青山町役場のご協力により８名の高校生を含めて総勢16名の方々に発掘作業に加わっていただき、順調に調査を終了することができた。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

坂本芳治、坂本君代、赤井弘子、砂原嘉壽代、小川文子、松永あや子、松永知子、内保隆幸、山内江里奈、櫻井淳子、櫻井啓子、中瀬拓真、猪木弥生、森岡まゆ、永井歩、松尾くに子

(2)文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法第57条の３第１項(文化庁長官あて)
平成９年７月10日付け道建第957号(県知事通知)
・法第98条の２第１項(文化庁長官あて)
平成９年７月28日付け教文第1545号(県教育長通知)
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(久居警察署長あて)
平成９年10月７日付け・教文第6－78号（六地蔵Ｃ遺跡）・教文第6－77号(伊勢路道筋遺跡)（県教育長通知)

3　調査の方法

ａ　今回の調査では、調査区内を４ｍ四方の枡目で切ることによって小地区を設定した。南から数字、東からアルファベットを付け、枡目の南東隅の交点をその地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

ｂ　調査区の平面図は1/20で作成している。また、遺物を伴うような遺構は、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

ｃ　六地蔵Ｃ遺跡については、調査区中央部に用水路があるため、調査区を北半分と南半分とに分けて調査を進めた。そのため、全体の遺構写真撮影は２度に分けて行った。

4　周辺の遺跡について

今回の調査区の北側の丘陵部に存在する古墳については、遺跡台帳及び報告書の間でその名称について混乱がみられため、改めて現地を坂倉・新名の２名で踏査を行い、一部古墳の名称を変更した。

また、当地周辺にあるとされる通称「東禅寺跡」については、地元における聞き取り及び現地踏査の結果、その場所についてある程度の特定を行った。詳しくは、付編に記した。

II　位置と歴史的環境

1　位　置

六地蔵C遺跡(1)と伊勢路道筋遺跡(2)は、行政上は三重県名賀郡青山町伊勢路にある。青山町は、三重県西部の伊賀地域の東南端に位置する。東は布引山脈を挟んで白山町に、北は上野市及び阿山郡大山田村に、西は山岳部を挟んで名張市に、南は一志郡美杉村にそれぞれ接している。この町の中央には木津川が流れ、大阪湾へと注いでいる。また、この地は大和と伊勢を結ぶルート上に位置し、かつては初瀬街道が貫くなど、古くから交通の要衝として栄えていた。町の中心は阿保盆地と呼ばれる小規模の平地である。さらに、伊勢路はこの地域との間に緩やかな丘陵部を挟み、一見小盆地を形成するように見える地域である。青山町の中でも東端に位置し、青山峠で伊勢国に続いている。以下、この地域周辺の主な遺跡について時代順に述べる。

2　歴史的環境

＜旧石器時代～縄文時代＞

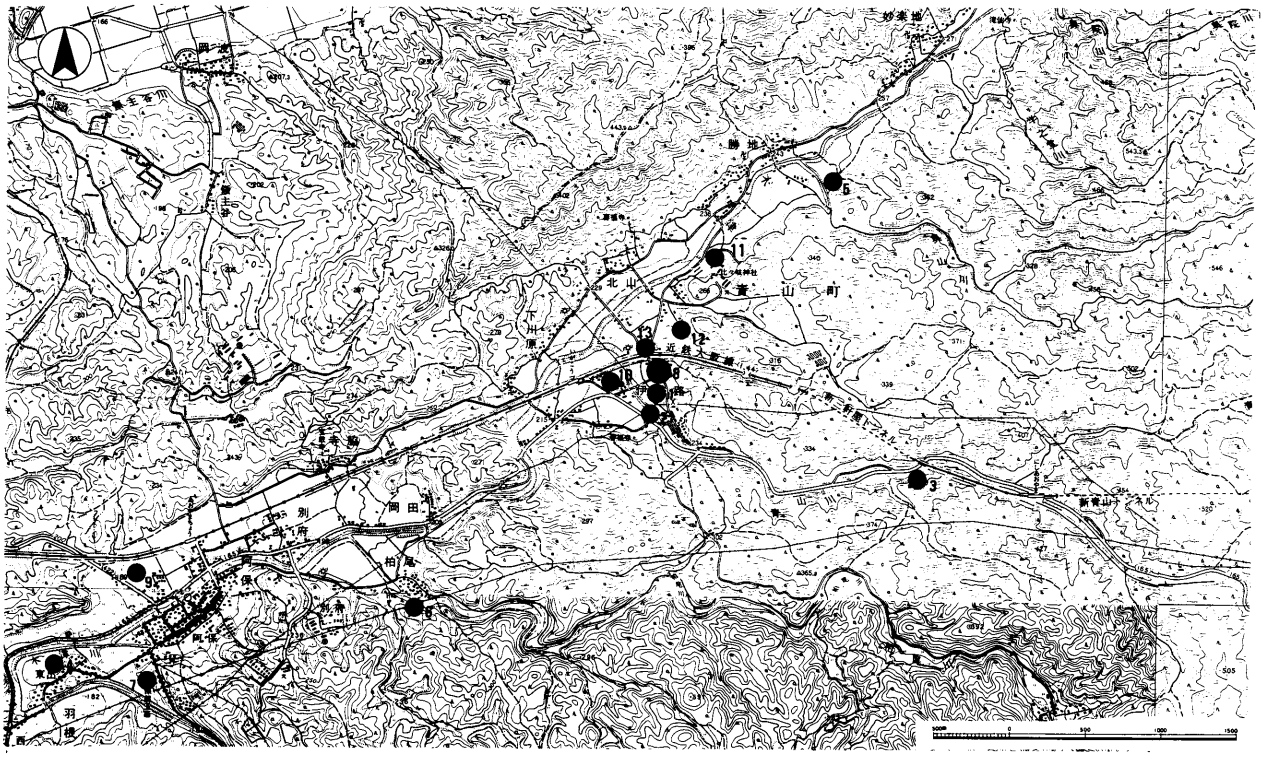
青山町においては、旧石器時代を示す資料を出土した遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡として、伊賀における最初の縄文土器の発見として知られるナメリ石谷遺跡(3)がある。さらに、布引開拓地遺跡、羽根中島遺跡(4)、種生八王子社遺跡などからも縄文土器や石器が確認されている[1]。近年、発掘調査が行われた勝地大坪遺跡(5)[2]からは、落とし穴状遺構に伴って縄文土器が出土している。

＜弥生時代＞

青山町内では、前期・中期に遡る遺跡は確認されていない。後期になると、町内各地で遺物が採取されている。柏尾湯船遺跡(6)からは突線紐式銅鐸が出土し注目されている。伊賀地域において銅鐸が出土しているのは、これを含め4カ所である。

＜古墳時代＞

青山町における古墳は、大半が横穴式石室を持つ後期古墳であり、前・中期に遡る古墳は確認されていない。ただ、阿保地内西側に所在する伝「息速別命陵」(7)からは円筒埴輪が採集されており、5世紀末葉から6世紀初頭の年代が考えられている。一方、伊勢路周辺には六地蔵古墳群(8)が所在している。中でも六地蔵1号墳は墳丘が今も残され、3号



第1図　遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院「伊勢路・阿保」より）

墳・5号墳・9号墳は石室が一部残っている。このほか、青山町遺跡調査会によって調査された沢代遺跡(9)[③]において、5世紀初頭の集落跡が確認されている。

＜古代＞

高寺遺跡(10)[④]では、飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出された。川南A遺跡(11)では、奈良時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物が検出された。また、藤原実遠の荘園目録に「上津阿保村、中津阿保村」の名が見えることから、青山町には平安時代中期にはすでに荘園が成立していたと考えられる。

＜中世以降＞

町内各地で瓦器椀や中世の陶器が数多く採集されている。伊勢路内に限ってみても、いくつかの中世の遺跡が確認されている。高寺遺跡では、鎌倉時代初頭の掘立柱建物が検出され、瓦器の皿や椀、白磁の皿などが出土している。六地蔵A遺跡(12)[⑤]では、石組みの井戸を伴う中世の集落跡が確認され、瓦器椀等が出土している。六地蔵B遺跡(13)[⑥]では、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物が検出され、青磁・瓦器のほか鉄滓が出土した。

室町時代以降になると町内でも多くの中世城館が築かれ、伊勢路内に存在する高嶋氏館跡を含めて、47カ所が確認されている。

さらに江戸時代には、伊勢路の地は阿保越参宮道最大の難所である青山峠西側の宿場として栄えた。

(註)

① 『青山町史』青山町史編纂委員会1979年

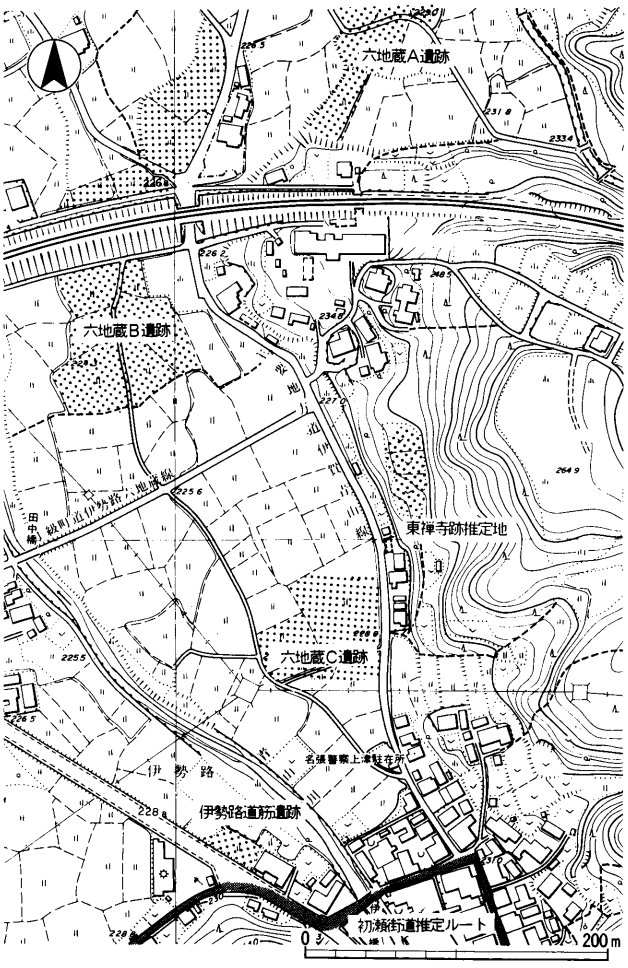
② 吉沢 良「勝地大坪遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告 第1分冊』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1992年

③ 青山町遺跡調査会『沢代遺跡調査報告書』青山町文化財調査報告7 1995年

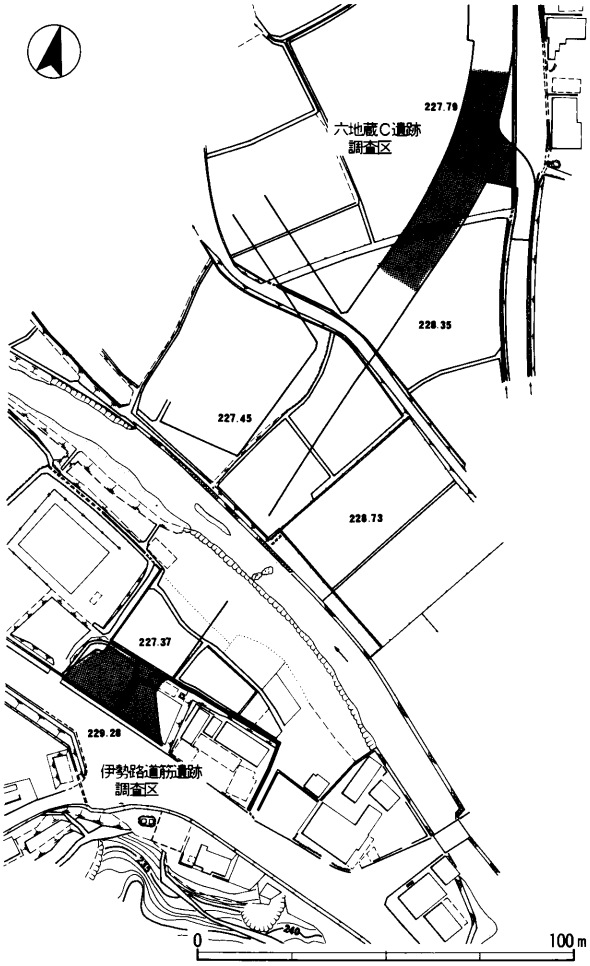
④ 野口美幸「高寺遺跡発掘調査概要」三重県埋蔵文化財センター 1995年

⑤ 吉沢 良「六地蔵A遺跡発掘調査報告」『六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年

⑥ 越賀弘幸「六地蔵B遺跡発掘調査概要」三重県埋蔵文化財センター 1996年



第2図 遺跡地形図（1:5,000）



第3図 調査区位置図（1:2,000）

III　六地蔵C遺跡　調査の成果

1　地形及び基本層序

当遺跡は木津川支流の青山川右岸から東方へ150mの所に位置する。現況は水田であるが、東側にはすぐ丘陵が迫っている。標高は228m程度である。土層の基本層序は、耕作土下に暗褐色の遺物包含層があり、その下が黄色砂質土層となる。その黄色砂質土層上面を遺構検出面とした。

2　遺構

調査の結果、鎌倉時代～室町時代を中心とした遺構が確認された。

(1)溝

ＳＤ１　調査区南端の溝である。深さは10cm～20cmである。ＳＫ４によって中央部で切られている。瓦器皿(1)・瓦器椀(2・3・4)が出土した。

ＳＤ６　調査区南端の溝である。深さは10cm～15cmである。瓦器椀(5)が出土した。

ＳＤ33　調査区北端の溝である。深さは10cm程度である。瓦器椀が出土した。

(2)土坑

ＳＫ４　調査区南端にある径約２mの円形の土坑である。深さは50cm程度である。瓦器皿(6)・瓦器椀(7)が出土した。

ＳＫ８　調査区南よりの溝状の土坑である。調査区外へ延び、全体像は不明であるため土坑とした。深さは25cm程度である。山茶椀(8)・瓦器椀(9)が出土した。

ＳＫ９　調査区中央の土坑である。深さは30cm程度である。瓦器椀(10)が出土した。

ＳＫ30　調査区中央やや北よりの土坑である。深さは30cm程度である。土師器皿(13・14)が出土した。出土遺物からみると他の遺構より若干新しい時期のものであると考えられる。

ＳＫ36　調査区中央やや北よりの土坑である。深さは30cm程度である。土師器皿(15)・瓦器椀(16・17)・青磁椀が出土した。

3　遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナバット約４箱分で、時期は鎌倉時代～室町時代に集中する。以下、遺構別に述べる。詳しくは遺物観察表を参照されたい。

ＳＤ１出土遺物

瓦器皿(1)内外面ともにヘラミガキは確認できない。口縁部にはヨコナデが施されいる。底部内面には、ジグザグ状の暗文が施されており、炭素の吸着は悪いものである。山田編年[1]（以下、瓦器の編年は山田猛氏のものを引用する。）のII段階に相当し12世紀代のものと考えられる。

瓦器椀(2)螺旋を描く暗文があり、山田編年によるII段階後半、12世紀後半のものであると考えられる。

瓦器椀(3)高台は断面が三角形のもので、底部内面には螺旋を描く暗文があるもので、12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

瓦器椀(4)ヘラミガキは、外面ではわずかに残り、内面ではやや荒くなる。口縁部はヨコナデによって屈曲している。山田編年によるII段階３型式～III段階２型式、12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ６出土遺物

瓦器椀(5)器高が低く、内面の調整は荒く、炭素の吸着も悪いもので、山田編年によるIII段階２型式以降のものと思われ、13世紀後半のものと考えられる。

ＳＫ４出土遺物

瓦器皿(6)山田編年によるIII段階１～２型式、13世紀前半代のものと考えられる。

瓦器椀(7)沈線が無く高台は退化し体部は丸みを持つもので、山田編年によるIII段階３型式、13世紀後半のものと考えられる。

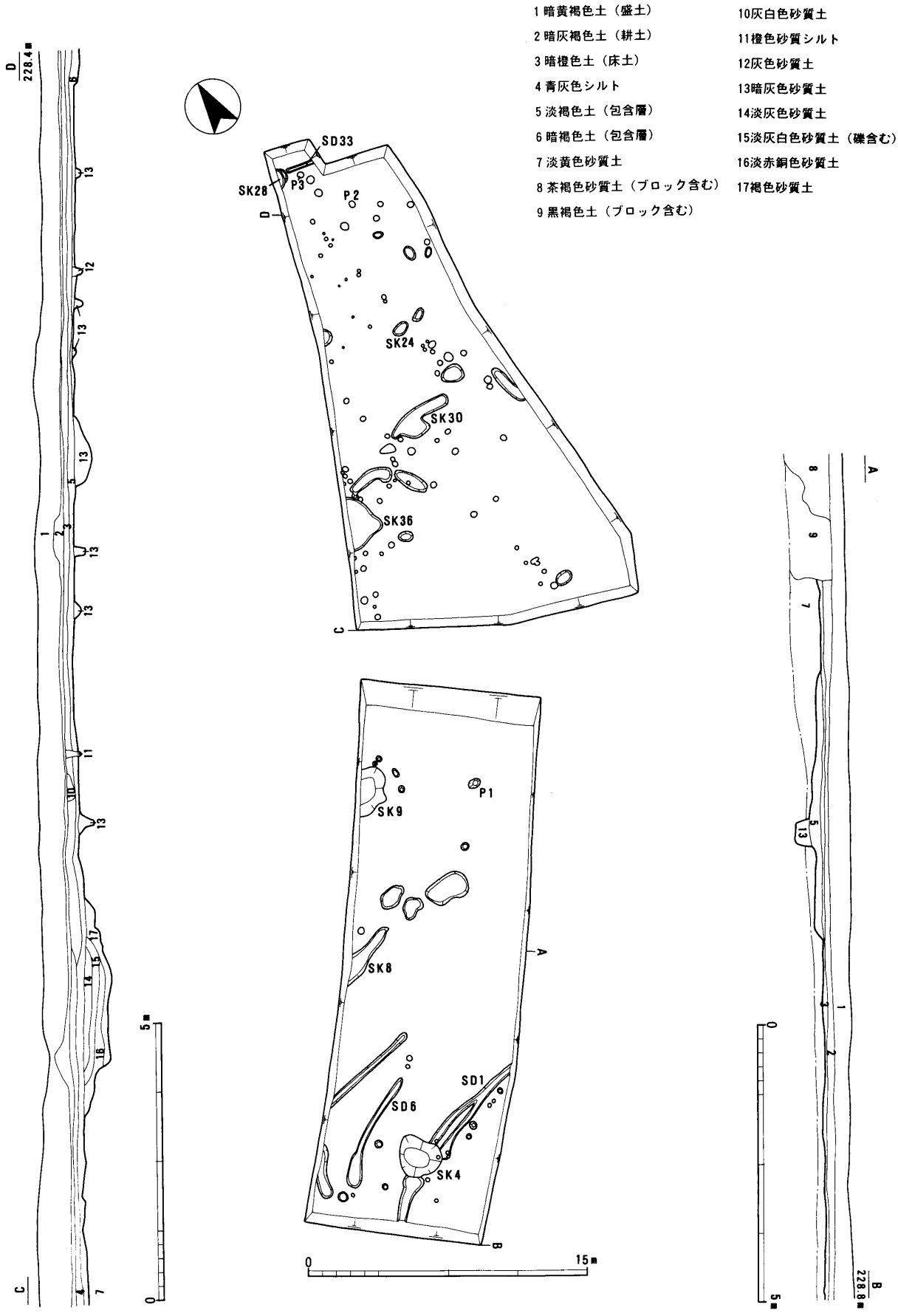
ＳＫ８出土遺物

瓦器椀(8)器高が低く、内外面ともにヘラミガキが荒く、山田編年によるIII段階以降のもので、13世紀代のものであると考えられる。

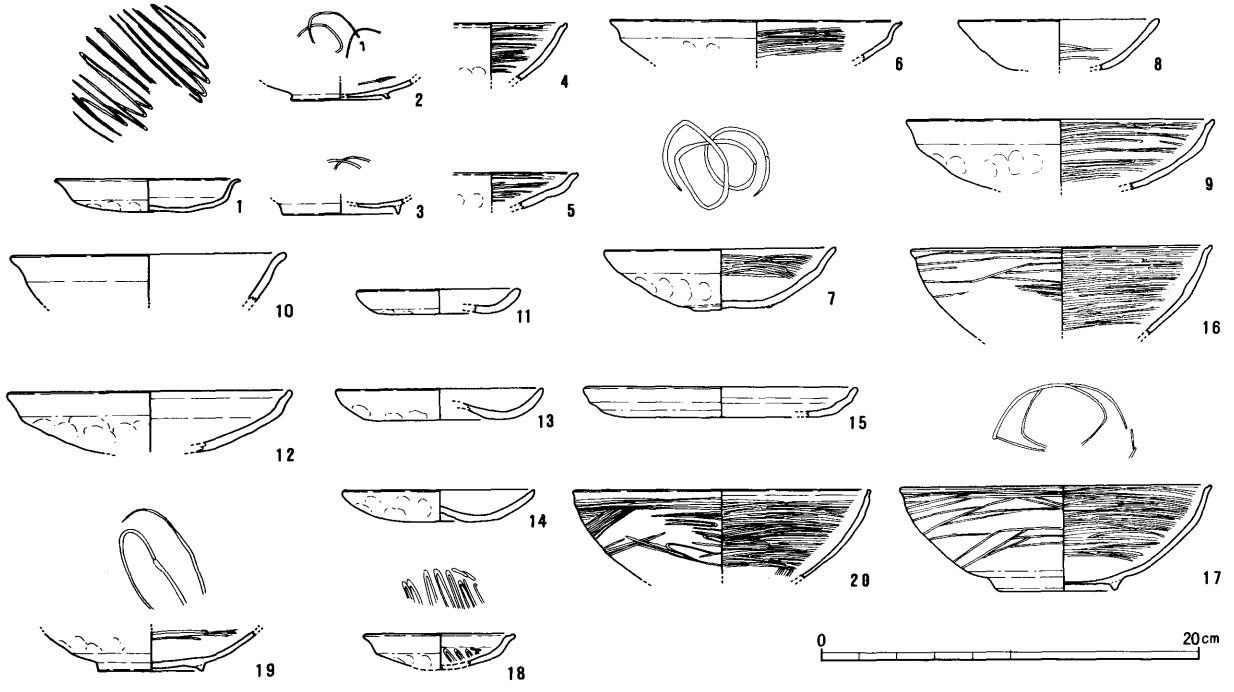
山茶椀(9)口縁部がやや外反するもので、藤澤良祐氏の山茶椀編年[2]による第４型式と思われる。

ＳＫ９出土遺物

瓦器椀(10)口縁部内面の段差の無いもので、外面の炭素の吸着は悪い。山田編年によるIII段階３型式、



第4図　調査区遺構平面図（1:300）・土層断面図（1:100）



第５図　出土遺物実測図（１：４）

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	測定値(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	002-03	瓦器皿	f −5 SD1	9.6	−	5.8	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	密	良	表面：灰 断面：灰白	ほぼ完存	
2	002-06	瓦器椀	f −6 SD1	−	4.9	−	外面: 貼付高台 内面: ミガキ	やや密 微砂粒少量	良	表面：灰 断面：灰白	底:1/4	
3	002-05	瓦器椀	e −5 SD1	−	6.1	−	外面: 貼付高台 内面: ミガキ	密	良	表面：灰 断面：灰白	底:1/8	
4	003-10	瓦器椀	e −5 SD1	−	−	−	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	密	良	表面：灰 断面：灰白	底:3/4	
5	003-11	瓦器椀	e −5 SD6	−	−	−	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	やや密	並	表面：灰白 断面：灰白		
6	003-07	瓦器皿	e −5 SK4	15.3	−	−	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	密	並	表面：灰白 断面：褐灰		
7	002-05	瓦器椀	e −5 SK4	12.1	3.9	3.4	外面　ヨコナデ、オサエ、貼付高台 内面　ナデ	やや密	並	表面：灰 断面：灰白	1/3	
8	003-06	陶器 山茶椀	d −8 SK8	14.3	−	−	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	密	並	灰白		
9	001-05	瓦器椀	d −8 SK8	16.2	−	−	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	密	良	表面：灰 断面：灰白	1/8	
10	003-08	瓦器椀	d −8 SK9	10.6	−	−	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	密	並	表面：灰 断面：灰白		
11	003-05	土師器皿	d −17 SK24	8.4	−	1.3	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	やや密	並	浅黄橙	1 /4	
12	003-01	土師器皿	c −19 SK28	14.9	−	−	外面: ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙	1/8	
13	003-09	土師器皿	d −16 SK30	10.9	−	1.7	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	並	淡赤褐		
14	003-03	土師器皿	b −16 SK30	10.1	−	1.7	外面: オサエ 内面：ナデ	やや粗	並	にぶい橙	1/3	
15	003-02	土師器皿	d −14 SK36	14.3	−	1.6	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ	やや粗	並	灰白	1/6	
16	001-03	瓦器椀	d −14 SK36	15.9	−	−	外面: ミガキ 内面: ミガキ	密	良	表面：灰 断面：灰白	1/5	
17	001-01	瓦器椀	d −14 SK36	16.4	6.0	5.6	外面: ミガキ、貼付高台 内面: ミガキ	密	良	表面：灰 断面：灰白	1/4	
18	002-04	瓦器皿	e −10 pit1	7.8	−	−	外面：ヨコナデ、オサエ 内面: ヨコナデ	密	良	表面：灰 断面：灰白	1/4	
19	002-02	瓦器椀	d −18 pit2	−	5.8	−	外面: オサエ、貼付高台 内面：オサエ	密	良	表面：灰 断面：灰白	底部完存	
20	001-04	瓦器椀	c −19 pit3	15.6	−	−	外面: ミガキ 内面: ミガキ	密	良	表面：暗灰 断面：灰白	1/7	

第１表　遺物観察表

13世紀後半のものと考えられる。

ＳＫ24出土遺物

土師器皿(11)13世紀前半～半ばまでのものと考えられる。

ＳＫ28出土遺物

土師器皿(12)12世紀代のものと思われる。

ＳＫ30出土遺物

土師器皿(13)13世紀後半のものであると考えられる。

土師器皿(14)　いわゆるヘソ皿と呼ばれるもので、14世紀～16世紀のものである。

ＳＫ36出土遺物

土師器皿(15)12世紀代のものと思われる。

瓦器椀(16)　外面にはヘラミガキが残り、内面のヘラミガキは密である。山田編年によるII段階１～３型式、12世紀前半代のものであると考えられる。

瓦器椀(17)　明瞭な沈線が施され、内面のヘラミガキもていねいである。山田編年によるII段階２型式、12世紀前半のものと考えられる。

その他、12世紀代の同安窯系と思われる青磁椀の細片が出土した。

ピット１出土遺物

瓦器皿(18)　内面にはジグザグを描く暗文が施され、12世紀～13世紀前半のものであると考えられる。

ピット２出土遺物

瓦器椀(19)　高台はしっかり残っているが、暗文は簡略化されている。山田編年によるII段階４型式～III段階１型式、12世紀後半代～13世紀初頭のものであると考えられる。

ピット３出土遺物

瓦器椀(20)　ヘラミガキは、外面で残り内面では荒くなり始める。山田編年によるII段階前半のもので12世紀前半代のものであると考えられる。

4　結語

今回の調査によって、遺構として土坑・溝・ピットを検出し、遺物として主に鎌倉時代～室町時代の土師器・瓦器等が出土した。当遺跡は、鎌倉時代～室町時代の集落跡であると考えられる。また、当遺跡の北東の斜面には現在でも五輪塔が確認できる「東禅寺跡」と考えられる場所もあり、今回の調査区に限らず中世の集落跡の広がりが予想される。

（註）

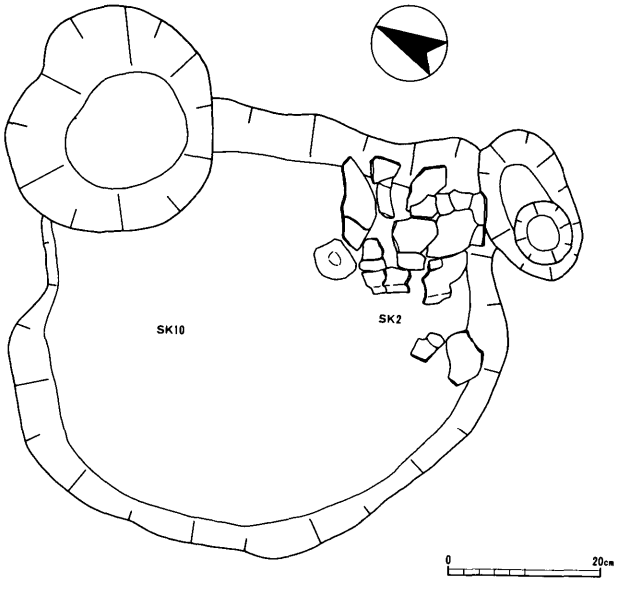
① 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究II』中世土器研究会　1986年

② 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』　三重県埋蔵文化財センター1996年

Ⅳ　伊勢路道筋遺跡　調査の成果

1　地形及び基本層序

当遺跡は木津川支流の青山川左岸に位置する。標高は海抜228m程度で、地形は南から北に向かって緩やかに傾斜し、調査区北端は川に向かって落ち込む。層序は基本的に灰褐色の耕作土下に淡赤褐色土の遺物包含層が堆積し、表土下40cm程度で淡黄色砂質土の地山面に到達、同面で遺構を検出した。



第6図　土坑2土器出土状況図（1：20）

2　遺　構

調査の結果、鎌倉時代～室町時代を中心とした遺構が確認された。

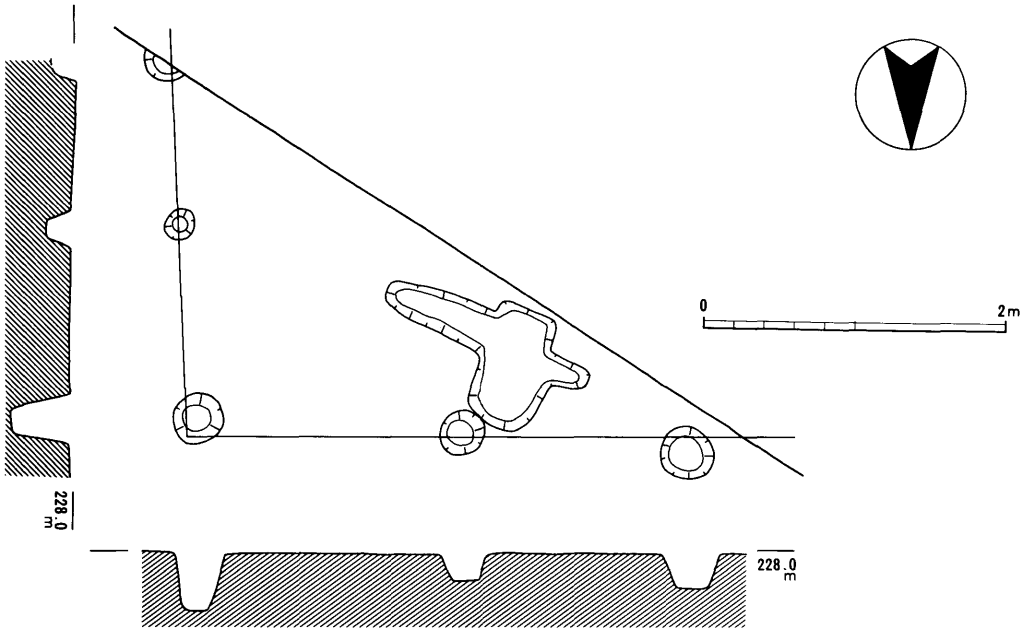
(1)掘立柱建物

ＳＢ１　調査区南端に位置し、規模は桁行２間以上×梁行２間以上で、棟方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴は円形で直径15～30cm、深さ20～40cmである。この建物は、調査区南側へ展開する。詳しい時期は不明だが、中世に収まるものと考えられる。

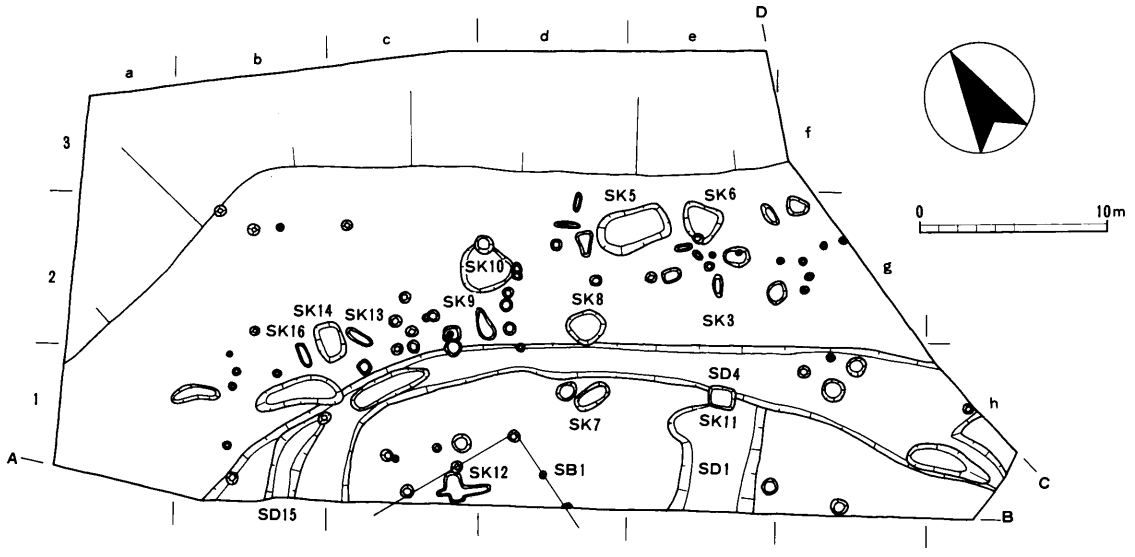
(2)溝

ＳＤ１　調査区の中央部を南北方向に延びる溝で、南端がＳＤ４によって切られる。幅は約２m、深さは約50cm。埋土は暗褐色土で、橙色シルトブロックや炭を含む。溝の底面では拳大から人頭大の礫層を確認した。埋土からは、土師器の皿（1，4）や鍋、瓦器椀、青磁椀（15）などが出土しており、この溝は15世紀末に埋没したものと考えられる。

ＳＤ４　調査区を東西に延びる溝で、幅0.9m～3.6m、深さ40cm程度である。溝は調査区東端で二手に分かれ、西端は南に湾曲する。褐色砂質土の埋土から、土師器皿（10、13）、擂鉢（11）、石器（32）などが出土し、14世紀末～15世紀代と考えられる。

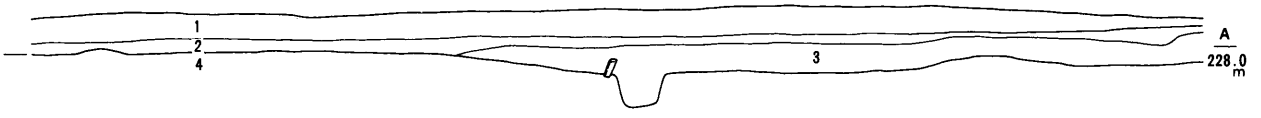


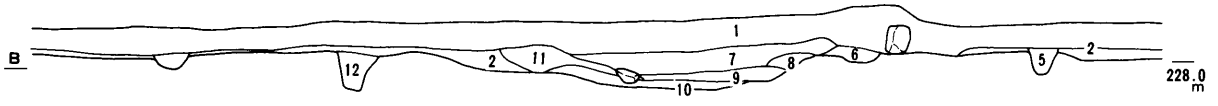
第7図　掘立柱建物ＳＢ１平面・断面図（1：50）



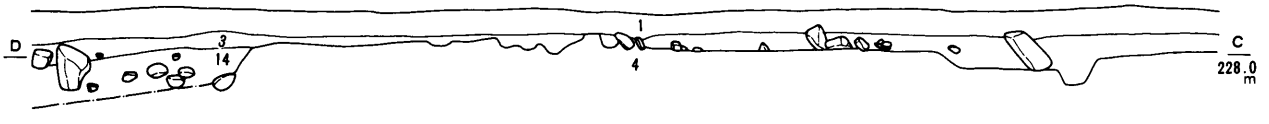
伊勢路道筋遺跡平面図（1:200）

南壁土層図（1:80）





東壁土層図（1:80）



1．灰褐色土（耕作土）　2．淡赤褐色土（包含層）　3．暗褐色土（包含層）
4．黄褐色砂質土（地山）　5．褐色土　6．暗褐色土
7．炭まじり暗褐色土　8．明褐色土　9．黄褐色シルト
10．褐色砂質土　11．褐色土・明橙色シルトブロック含む　12．褐色砂質土
13．暗褐色土　14．礫まじり暗褐色土

第８図　調査区遺構平面図・土層断面図

(3)土坑

ＳＫ２　ＳＫ10の東部底面より土師器長胴甕（26）と椀（22）がかたまって出土し、ＳＫ10とは別の９世紀中頃の遺構と考えられる。遺構の上部がＳＫ10によって削平を受けているため遺構の形状は不明。

ＳＫ３　長径0.6m、短径0.25mの楕円形の土坑で、深さは35cmである。陶器椀(25)や土師器片が出土している。詳しい時期は特定できないが、中世に収まるものと考えられる。

ＳＫ５　長径２m、短径1.1mの楕円形の土坑で、深さは25cm程度である。青磁椀（14・15）や土師器皿などが出土しており、15世紀代と考えられる。

ＳＫ６　直径１m程度の不定形の土坑で、深さは約20cmである。出土遺物はなく、時期は不明。

ＳＫ７　長径１ｍ、短径0.5ｍの楕円形の土坑で、深さは約40㎝である。出土遺物からは詳しい時期は特定できないが、中世に収まるものである。

ＳＫ８　直径0.8ｍ程度の楕円形の土坑で、深さは約30㎝である。土師器片や瓦器片が出土しており、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

ＳＫ９　長径0.8ｍ、短径0.3ｍの楕円形の土坑で深さは約20㎝である。土師器皿や須恵器杯身、瓦器片、陶器片などが出土しており、中世の遺構である。

ＳＫ10　直径約1.2ｍの楕円形の土坑で、深さは20㎝程度である。瓦器椀（17、18）や青磁椀（21）などが出土し、15世紀代の遺構と考えられる。

ＳＫ12　長辺14ｍ程度の不定形の土坑で、深さは約20㎝である。土師器皿や鍋、瓦器片が出土しており、14世紀頃と考えられる。

ＳＫ13　長径0.8ｍ、短径0.3ｍの楕円形の土坑で、深さは約15㎝である。瓦器片が出土している。特定できないが、13世紀代と思われる。

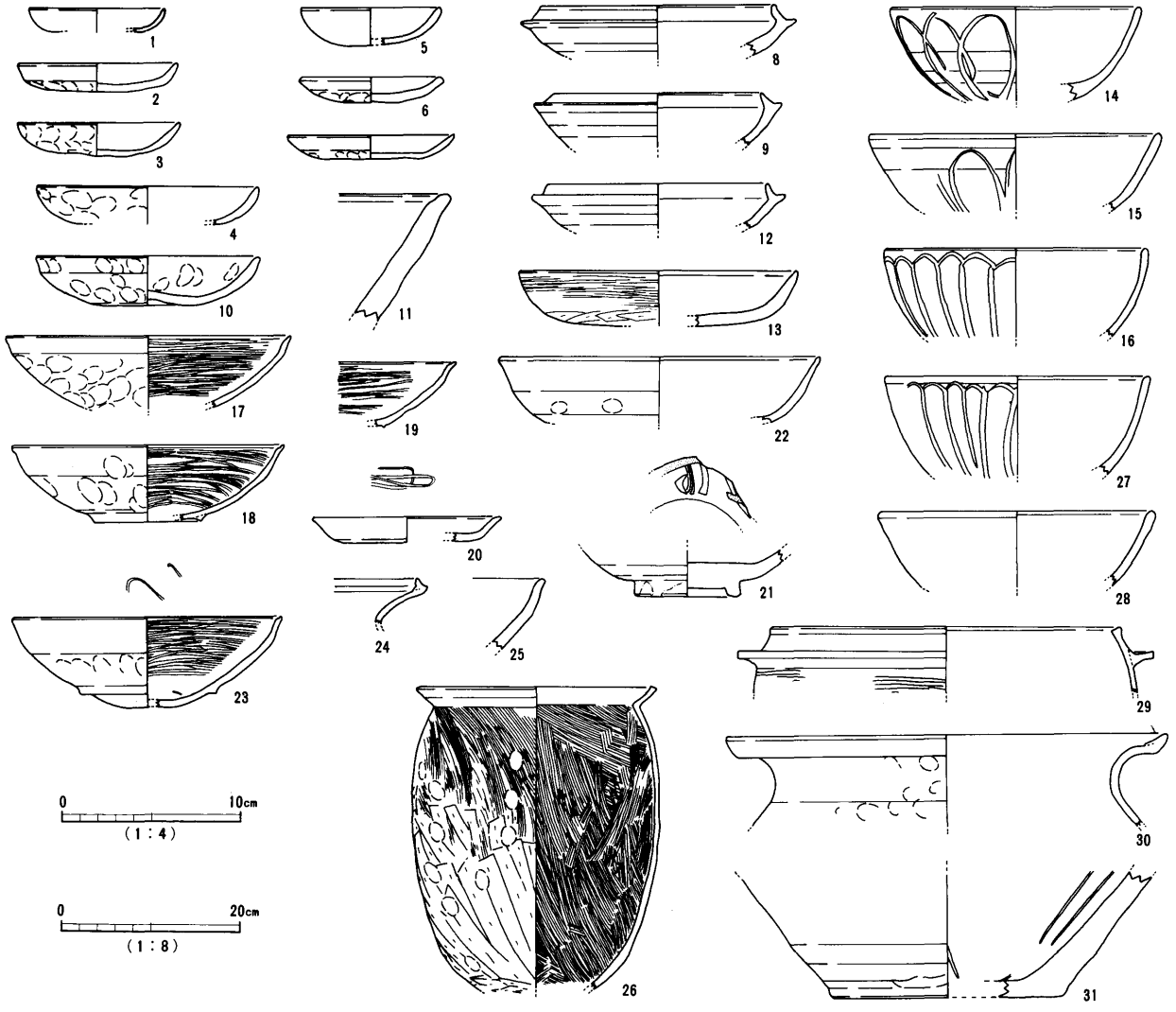
ＳＫ14　長径１ｍ、短径0.7ｍの長方形の土坑で、深さは約35㎝である。土師器羽釜形鍋や瓦器片などが出土していおり、中世後半の遺構である。

ＳＫ15　長径0.7ｍ、短径0.2ｍの土坑で、深さは約30㎝である。陶器卸し皿などが出土しており、中世後半の遺構である。

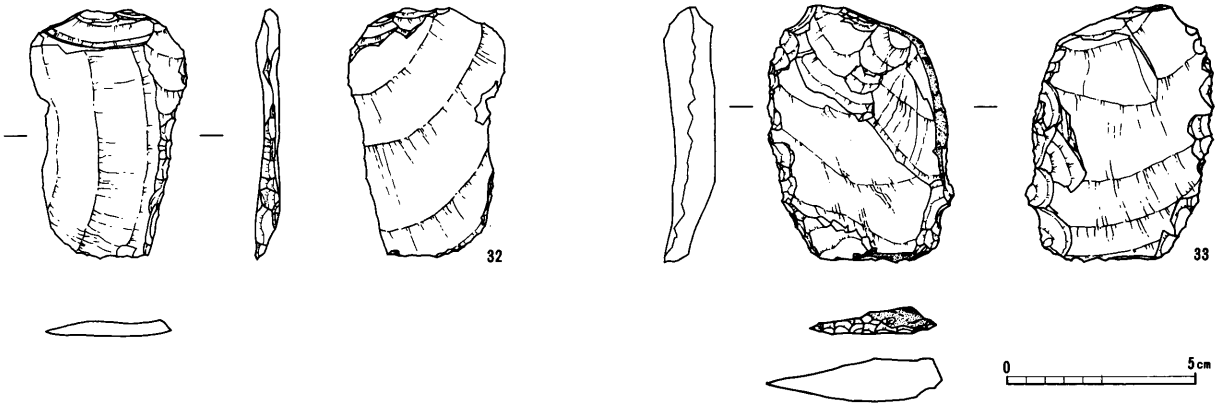
ＳＫ16　長径1.3ｍ、短径0.4ｍの細長い土坑で、深さは12㎝である。陶器片や土師器片が出土している。中世以降の遺構である。

3　遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナバット約10箱分で、鎌倉時代後半～室町時代後半のものが大半



第９図　遺物実測図（26は１：８、他は１：４）



第10図　石器実測図（１：２）

を占める。遺物は遺構別に述べる。詳しくは遺物観察表を参照されたい。

ＳＤ１出土遺物

土師器鍋(24)は口縁端部が断面三角形状につまみ上げられるもので、南伊勢系鍋の伊藤分類[①]第４段階に比定される。15世紀末と考えられる。青磁椀(16)は外面に幅の狭い蓮弁文が描かれる。破片の断面には全面に漆が付着しており、破損した部分を漆で接合して使用していたものであろう。龍泉窯系のもので、15世紀代と考えられる。

ＳＫ２出土遺物

土師器杯(22)は口縁部外面に強いナデを施し、体部との境に微かな稜をもつものである。９世紀中頃と考えられる。土師器長胴甕(26)は胎土が粗く、砂粒を多く含む。口縁部は内外面とも強いナデ調整で、口縁端部が肥厚する。体部上位と中位に煤の付着が見られる。８世紀後半と考えられる。

ＳＫ10出土遺物

瓦器椀(17，19)は口縁部に強いナデ調整を施し、口縁部と体部の境に稜をもつものである。内面は口縁端部に段が見られる。(18)も同様の調整を施すが、(17)と比べ口縁部と体部の境が明瞭ではない。瓦器類は山田編年[①]III段階１型式に比定され、13世紀前半と考えられる。青磁椀(21)は、内面に劃花文が描かれる。高台は断面台形で、畳付部にも一部釉が付着している。13世紀後半～14世紀代と考えられる。

陶器椀(25)は体部から口縁部にかけて内湾し、端部が僅かに外反する。釉は内面全体と外面中段までかかる。瀬戸産のものである。

ＳＤ４出土遺物

土師器杯(13)はやや厚い器壁をもち、外面は口縁部から体部上位にかけてミガキが施されている。外面は全体的に煤の付着が見られる。８世紀後半と考えられる。須恵器杯身(12)は、田辺編年[③]TK209型式併行で、７世紀前半と考えられる。陶器擂鉢(11)は、胎土直径３㎜程度の砂粒を含む。外に向かって開く体部は、口縁端部でさらに外反する。内面には３～４条を単位とする櫛状具を用いたスリメが見られる。信楽産で14世紀後半と考えられる。石器(32)はサヌカイト質のスクレイパーで、長辺4.95cm、短辺3.10cm、厚さ0.50cm、重さ7.2ｇを計る。長辺を成す縁辺部の片側約４／５に二次加工がなされ刃部としている。

ＳＫ５出土遺物

青磁椀(14，15)は、ともに外面に幅の広い蓮弁文が描かれる。龍泉窯系のもので15世紀代と考えられる。

包含層・その他の出土遺物

土師器羽釜形鍋(29)は口縁端部を外側につまみ出し、端部上面に平坦面をつくる。外面の鍔部以下には煤が全面に付着する。伊藤分類第４段階に収まるもので、15世紀前半と考えられる。鍋(30)も口縁部を内面に折り返すタイプの南伊勢系鍋で、外面全面に煤が付着する。伊藤分類第３段階で、14世紀後半と考えられる。須恵器(７，８)は、ともに田辺編年TK209型式併行で、７世紀前半と考えられる。瓦器椀(23)は底部が高台よりも大きく突き出している。山田編年III－１段階と考えられ、時期は13世紀前半

である。青磁椀(27)は幅の狭い蓮弁文が描かれ、龍泉窯系のものある。15世紀代と考えられる。(28)は、釉表面の凹凸が激しく、釉のかかり方が粗雑である。陶器擂鉢(31)は、胎土には直径１～５㎜程度の砂粒を多く含むもので、内面には２本を単位とする篦状具を用いたスリメが見られる。14世紀前半の信楽産と考えられる。石器(33)はサヌカイト質のスクレイパーで、長辺5.10cm、短辺3.70cm、厚さ1.00cm、重さ20.2ｇを計る。長辺を成す縁辺部の片側７／10程に二次加工を行い、刃部としている。側面には一部自然面を残す。

（註）

① 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』1　三重歴史文化研究会　1990

4　結語

今回の調査では、掘立柱建物１棟と溝２条、多数の土坑やピットを、さらに調査区の北端では川に向かって下降する落ち込みが確認された。調査地の南側から東側にかけて、かつて初瀬街道が通っていたと推定され、今回はこうした街道沿いの集落の縁辺部分を検出したものと考えられる。従って、集落は調査地の南東方向に展開するものと推測される。

また、今回の調査では遺物量の割に青磁椀の出土が多かったのも特徴的である。

② 山田　猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究II』　1986

③ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1980

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	1－02	土師器 皿	e－1 SD1	7.5	－	－	外面：体部オサエ、ナデ	密	良	淡橙褐色	1／5	
2	1－01	土師器 皿	d－2 SK2	8.8	1.6	－	外面：体部下半オサエ、ナデ	密	良	淡褐色	4／5	
3	1－03	土師器 皿	e－2 SK5	9.0	1.9	－	外面：体部オサエ、ナデ	密	良	淡橙褐色	1／2	口縁部に油煙付着
4	1－05	土師器 皿	e－1 SD1	12.3	－	－	外面：体部オサエ、ナデ	やや粗	良	淡赤褐色	1／5	
5	6－04	土師器 椀	c－1 pit 1	7.9	2.1	－	外面：体部下半オサエ、ナデ	やや密	良	淡褐色	3／4	
6	7－01	土師器 皿	a－1 包含層	7.1	1.5	－	外面：体部下半オサエ、ナデ	やや密	やや軟	淡褐色	1／4	
7	6－05	土師器 皿	e－2 pit 3	9.3	1.3	－	外面：体部下半オサエ、ナデ	やや密	良	淡黄褐色	2／5	
8	7－03	須恵器 杯身	c－1 包含層	11.6	－	受部径 15.5	ナデ	密	硬	灰白色	1／10	
9	7－05	須恵器 杯身	包含層	11.6	－	受部径 14.0	ナデ	密	やや軟	灰白色	1／10	
10	5－01	土師器 皿	b－1 SD4	12.4	2.7	－	外面：体部オサエ、ナデ	やや粗	良	橙色	3／5	
11	2－04	陶器 擂鉢	f－1 SD4	－	－	－	ナデ	やや粗	やや軟	乳白色	1／10	信楽産 スリメ（3～4本）
12	2－05	須恵器 杯身	g－1 SD4	12.2	－	受部径 14.1	ナデ	やや密	良	灰色	1／10	
13	1－06	土師器 杯	e－1 SD4	15.6	－	－	外面：上部ミガキ、中下半ｵｻｴ・ｹｽﾞﾘ 内面：ナデ	粗	良	淡橙褐色	1／5	
14	3－01	青磁 椀	e－2 SK5	14.0	－	－	外面：口縁部ナデ、体部ケズリ 内面：ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：暗青緑色	1／4	蓮弁文 龍泉窯系
15	3－02	青磁 椀	e－2 SK5	16.3	－	－	ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：明青緑色	1／10	蓮弁文 龍泉窯系
16	3－04	青磁 椀	e－1 SD1	14.5	－	－	ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：暗青緑色	1／5	蓮弁文、龍泉窯系 破損面に漆付着
17	2－01	瓦器 椀	d－2 SK2	15.9	－	－	外面：口縁部ナデ、体部オサエ 内面：口縁部ナデ、体部ミガキ	やや密	やや軟	黒褐色	1／5	
18	5－03	瓦器 椀	d－2 SK2	15.4	4.3	高台径 4.9	外面：オサエ 内面：ミガキ	密	良	黒褐色	1／5	
19	2－03	瓦器 椀	d－2 SK2	－	－	－	外面：口縁部ナデ、体部下半オサエ 内面：口縁部ナデ、内面ミガキ	密	良	黒褐色	1／5	
20	2－02	瓦器 皿	d－2 SK2	10.6	1.4	－	外面：口縁部ナデ、底部オサエ 内面：口縁部ナデ、底部ミガキ	密	良	黒褐色	1／10	
21	3－05	青磁 椀	d－2 SK2	－	－	高台径 6.0	ケズリ出し高台	密	硬	素地：灰白色 釉：暗青緑色	1／5	内面に劃花文 龍泉窯系
22	1－04	土師器 杯	d－2 SK 10	17.8	－	－	外面：ナデ、下半ケズリ、オサエ 内面：ナデ	やや密	良	淡赤褐色	1／3	
23	6－03	瓦器 椀	d－1 pit 1	15.0	5.7	高台径 7.7	外面：ナデ、下半オサエ 内面：ミガキ	密	良	黒褐色	2／5	
24	1－07	土師器 鍋	e－1 SD1	－	－	－	ナデ	やや密	良	淡褐色	1／10	
25	3－03	陶器 椀	e－2 SK3	－	－	－	外面：下半ロクロケズリ 内面：ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：淡黄緑色	1／10	瀬戸産
26	4－01	土師器長胴甕	d－2 SK 10	25.6	－	－	外面：口縁部ナデ、体部ﾊｹ・ｵｻｴ・ｹｽﾞﾘ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	やや粗	良	橙褐色	1／2	
27	7－02	青磁 椀	b－1 包含層	14.7	－	－	ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：暗青緑色	1／5	体部外面に蓮弁文 龍泉窯系
28	7－04	青磁 椀	e－2 包含層	15.2	－	－	ナデ	密	硬	素地：灰白色 釉：明緑青色	1／10	
29	7－06	土師器 鍋	a－1 包含層	19.5	－	鍔径 23.3	外面：口縁部ナデ、体部ハケ 内面：ナデ	密	良	淡橙色	1／10	
30	6－01	土師器 鍋	e－2 pit 1	24.8	－	－	外面：ナデ、頸部オサエ 内面：ナデ	やや密	良	暗褐色	1／10	
31	7－02 6-2	陶器 擂鉢	d－2 pit 5	－	－	底部径 12.8	ナデ	粗	良	乳白色	1／10	スリメ （2本／20 mm）

第2表　出土遺物観察表

付編　六地蔵Ｃ遺跡周辺の遺跡

六地蔵Ｃ遺跡の北側丘陵には谷ノ奥古墳群や六地蔵古墳群が所在し、北約280ｍには六地蔵１号墳が良好な形で残る。谷ノ奥古墳群と六地蔵古墳群については、一部でその所在地が混乱していたため、坂倉・新名の２名で改めて踏査を行い、これらを整理した。

その結果、６基の古墳で構成される谷ノ奥古墳群は、所在地が伊勢路字六地蔵と字谷ノ奥のほぼ境界に位置しており、その境界は明確ではないが、現在では谷ノ奥古墳群の大半は字六地蔵に所在していると理解されている。さらに、谷ノ奥古墳群と六地蔵古墳群は同一丘陵上に所在しており、一連の古墳群と考えるのが妥当である。

以上の理由により、今回谷ノ奥１～６号墳をそれぞれ六地蔵４～９号墳とし、これらを六地蔵古墳群として再編した。

また、同丘陵にはかつて「東禅寺」と呼ばれる寺院が所在していたといわれ、六地蔵４～７号墳付近で方形を呈する平坦面と五輪塔を確認し、当地を東禅寺跡と推定した。

１．六地蔵１号墳

南東から伸びる丘陵の先端から西に約100ｍの水田中に所在する円墳で、直径約８ｍ、高さ約３ｍの盛土が残る。かつて上津小学校により発掘調査が行われ、奥行き2.8m、幅2.2m、高さ1.6mの横穴式石室が確認されている。７世紀中頃の須恵器が出土している。

２．六地蔵２号墳

六地蔵古墳群の所在する丘陵の先端、３号墳の北側に位置する。全壊しており、現在では確認することができない。

３．六地蔵３号墳

丘陵の先端部分に位置する円墳で、奥行き4.5m、幅２ｍ、高さ1.3m程の石室が残存している。石室は南に向かって開口する。盛土は大半が失われている。

４．六地蔵４号墳（旧称：谷ノ奥１号墳）

３号墳の南東約120m、丘陵の南側斜面に４～７号墳の４つの古墳が集中して所在する。直径６ｍ程の円墳である。

５．六地蔵５号墳（旧称：谷ノ奥２号墳）

直径11m程の円墳で奥行き1.3m、幅1.3m、高さ１ｍ程の石室が残る。石室内には天井石が落下している。石室は斜面と同じく南西方向に向かって開口する。

６．六地蔵６号墳（旧称：谷ノ奥３号墳）

直径10m程の円墳で、一部が東禅寺跡平坦面によって削平される。

７．六地蔵７号墳（旧称：谷ノ奥４号墳）

丘陵の小尾根上に位置する直径15m程の円墳である。残りが悪く、明確には判別できない。

８．六地蔵８号墳（旧称：谷ノ奥５号墳）

青山牧場東40m、９号墳の北東15m程の所に位置する。直径15m程の円墳と報告されているが、今回の踏査では確認できなかった。

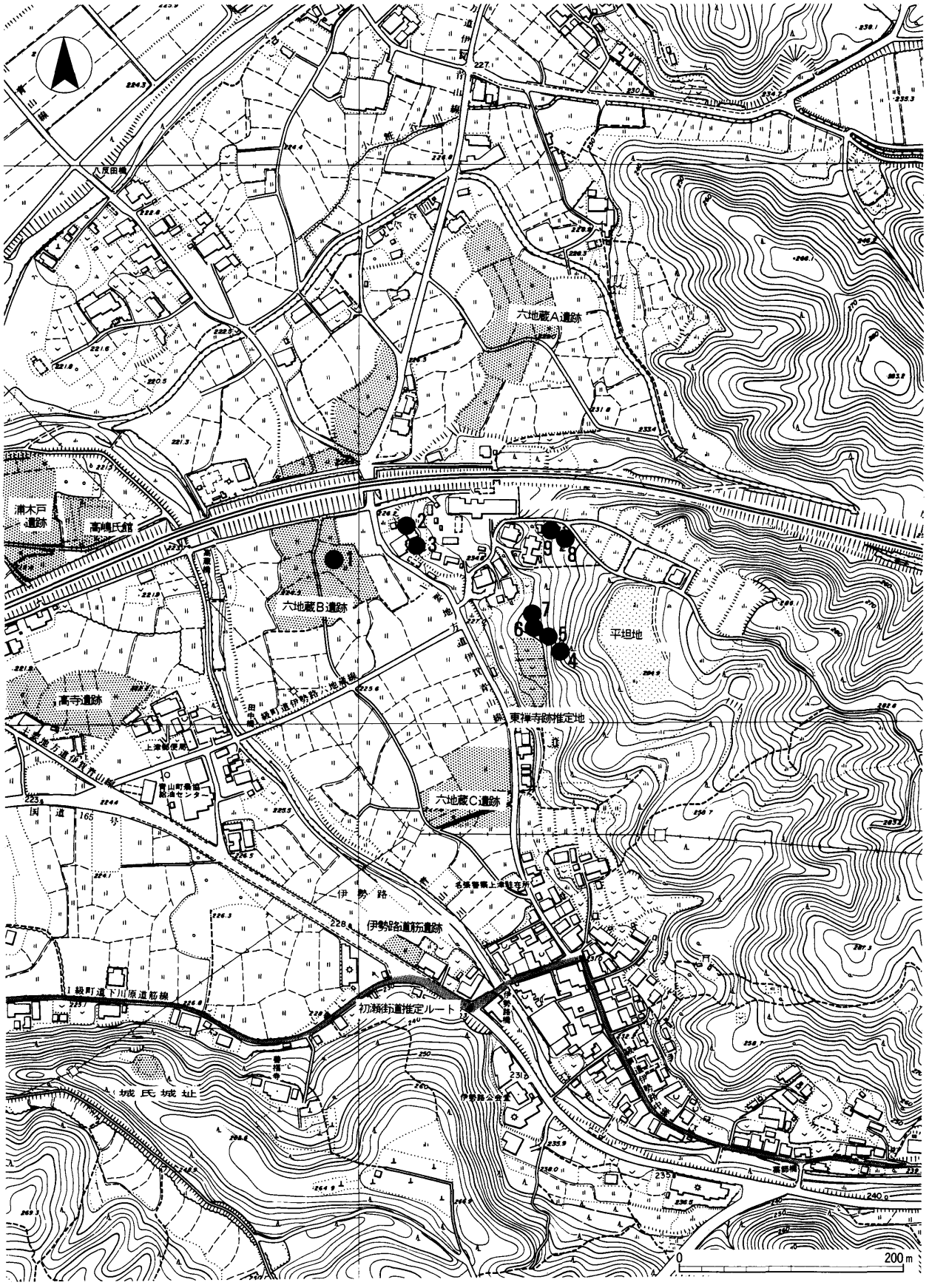
９．六地蔵９号墳（旧称：谷ノ奥６号墳）

青山牧場南東、水道タンク跡すぐ東側に位置する。直径14m、高さ1.5m程の円墳で、奥行き1.7m、幅1.3mの石室が残る。石室は南に向かって開口する。

10．東禅寺跡

同丘陵南斜面、六地蔵４～７号墳南側において、３～５面からなる方形・長方形の平坦面を確認した。この付近には「東禅寺」と呼ばれる寺院が所在していたといわれており、当地周辺にはかつて五輪塔が数多く分布していたそうである。現在でも五輪塔をいくつか確認することができ、当地が東禅寺跡である可能性が高いと思われる。

また、地元の聞き取りでは、東禅寺は丘陵山頂に所在していたとの説もある。当丘陵上部では広大な平坦面を見ることができ、ここも東禅寺跡の可能性が考えられる。

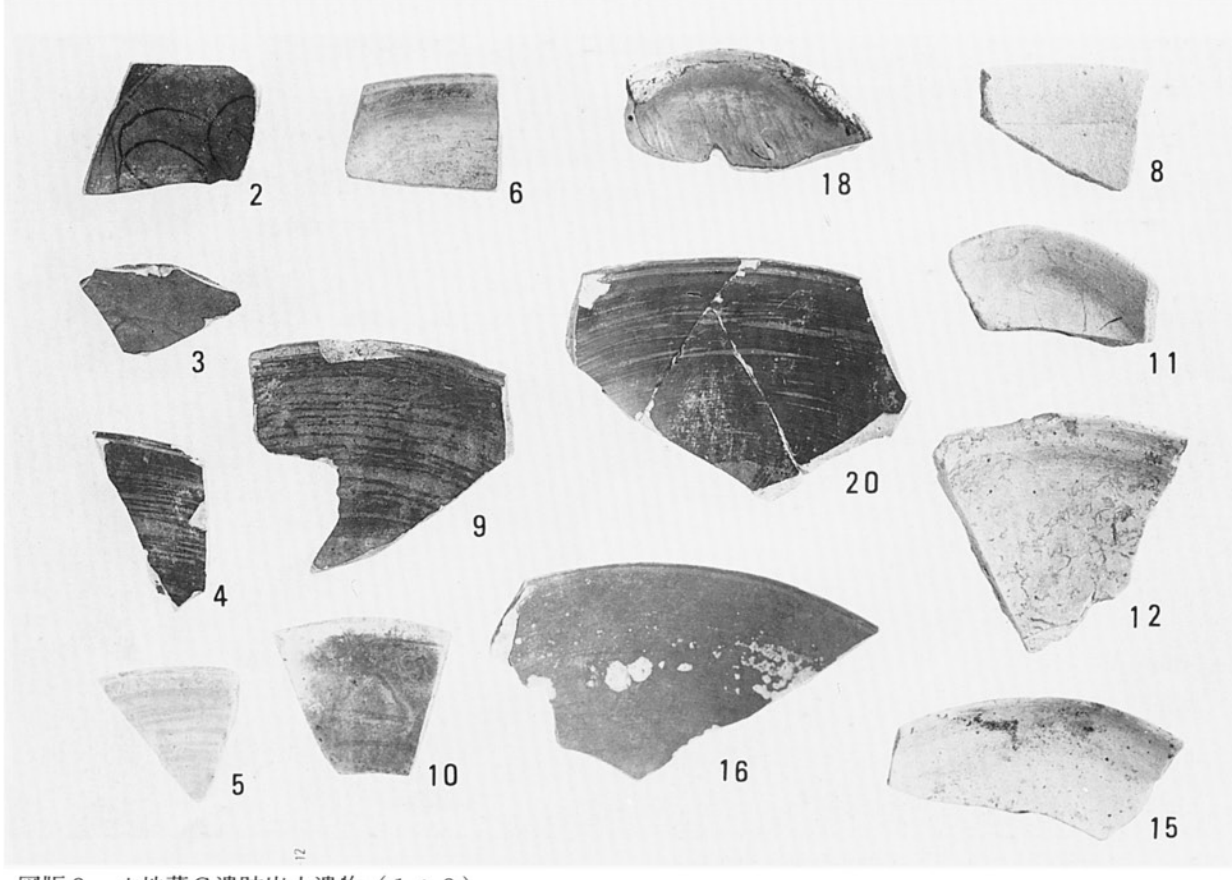


● 印 六地蔵古墳群（数字は各号墳に対応する）

第11図　六地蔵Ｃ遺跡周辺遺跡配置図（１：5,000）

図版１　六地蔵Ｃ遺跡調査区北半分全景（北から）

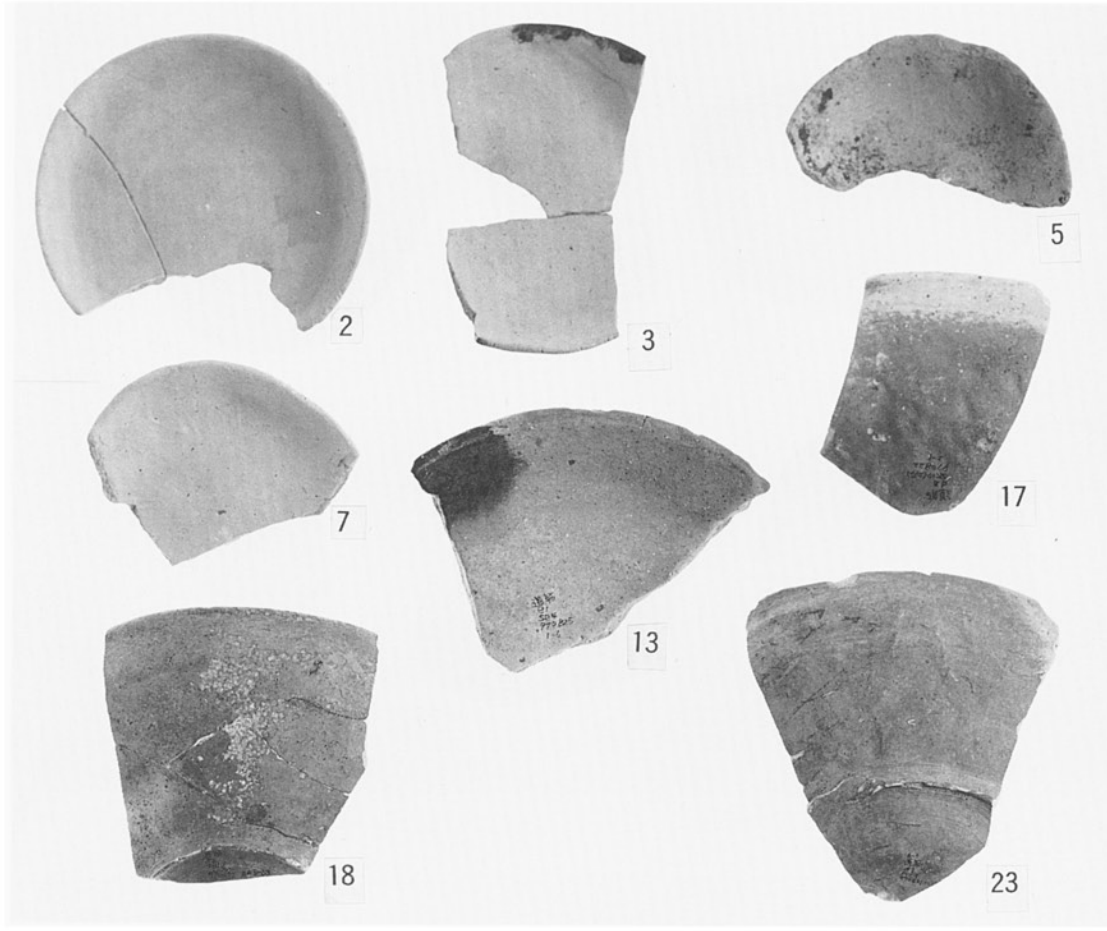
図版２　六地蔵Ｃ遺跡調査区南半分全景（南から）

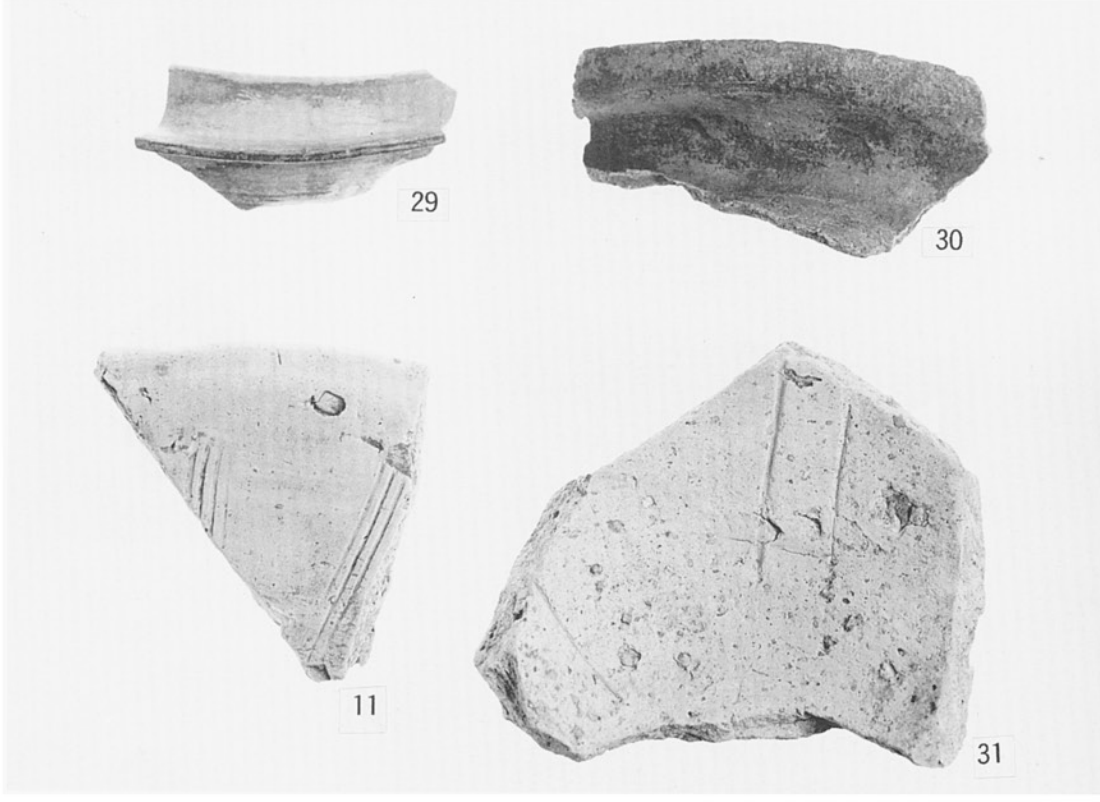


図版３　六地蔵Ｃ遺跡出土遺物（１：３）

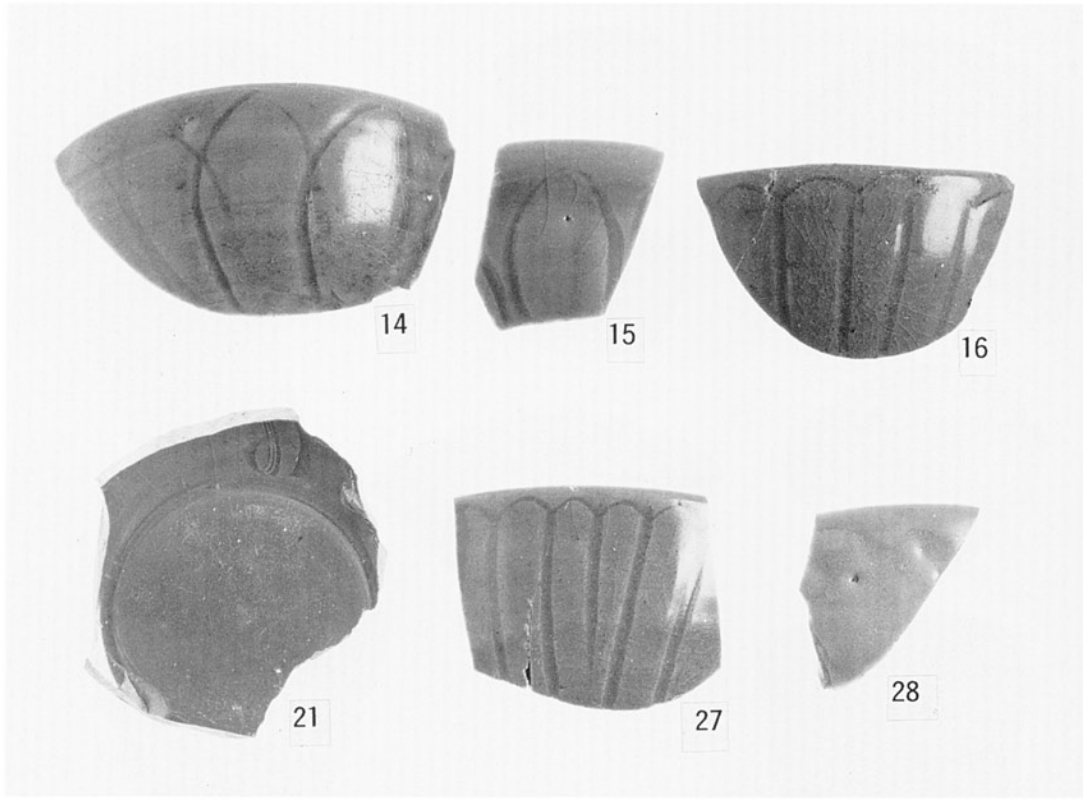
図版４　伊勢路道筋遺跡調査区全景（西から）

図版５　伊勢路道筋遺跡調査区全景（東から）





図版６　伊勢路道筋遺跡出土遺物（１：２）



図版７　伊勢路道筋遺跡出土遺物（１：２、26のみ１：４）

図版８　六地蔵３号墳（西から）

図版９　六地蔵３号墳（南から）

図版10　六地蔵１号墳（南から）

図版11　東禅寺跡推定地（東から）

報告書抄録

ふりがな	ろくじぞういいせき　いせじみちすじいせき　はっくつちょうさほうこく
書名	六地蔵Ｃ遺跡・伊勢路道筋遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	１８５
編著者名	坂倉一光・新名　強
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515 －0325　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　TEL0596-52-7031
発行年月日	西暦　１９９８年　９月　３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ろくじぞういいせき 六地蔵Ｃ遺跡	みえけんながぐんあおやま 三重県名賀郡青山 ちょういせじ 町伊勢路	245011	227	34° 40′ 45″	136° 12′ 50″	19970714～ 19970808	750	平成９年度主要地方道伊賀青山線［道新］緊急地方道路(A改良）工事
いせじみちすじ 伊勢路道筋 いせき 遺跡	みえけんながぐんあおやま 三重県名賀郡青山 ちょういせじ 町伊勢路	245011		34 40′ 38″	136° 12′ 48″	19970818～ 19970909	300	平成９年度主要地方道伊賀青山線［道新］緊急地方道路(A改良）工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六地蔵Ｃ遺跡	集落跡	鎌倉時代～室町時代	溝・土坑	土師器皿・瓦器皿・瓦器椀	なし
伊勢路道筋遺跡	集落跡	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物１棟 溝・土坑	石器・須恵器杯身・土師器皿・土師器長胴甕・瓦器皿・瓦器椀・青磁椀	なし

平成10(1998)年9月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告185

六地蔵C遺跡・伊勢路道筋遺跡発掘調査報告

1998年9月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社